神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

持続の知性化とアンチプラグマティズム—セミョーン・フランクのベルクソン解釈をめぐって

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2015-03-01
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 北見, 諭, KITAMI, Satoshi
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1878

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

持続の知性化とアンチ・プラグマティズム
── セミョーン・フランクのベルクソン解釈をめぐって ──

北見　　諭

1．はじめに

本論は、20世紀初頭のロシアの思想家であるセミョーン・フランクの認識論的、および存在論的な思考を、フランク自身が自らの思想に近いと見なしている[1]ベルクソン哲学との関連で読み解こうとするものである[2]。フランクに関しては、我々は本論に関連する論文を実はもう一本書いており、この論文はその論文の続編ということになる[3]。そのため、まずは最初の論文の内容を簡単にまとめておく必要があるが、さらに、前回と今回の二つの論文にわたる我々のフランク研究には、その背景となる研究があり、それについても簡単に触れておかなければならない。その研究というのは、20世紀初頭のいわゆる「ロシア・ルネサンス」の時代の思想全般を対象とする研究である。そのため、我々はまずは大枠となるそのロシア・ルネサンスの時代の思想に関するこれまでの研究を概観し、それから、フランクに関する前回の論文にも簡単に触れた上で、その後、本論文の問題に入っていくことにしたいと思う。

まずはロシア・ルネサンスの時代の思想についてであるが、我々がこれまでの研究で明らかにしてきたのは、この時代のロシア思想の多くにある種の共通性が見出されるということであった。つまり、彼らの思想は共通してある潜在的な志向に促されており、そうした志向のために、彼らの思想は表面的には多様な方向に向かって進みながら、最終的には同じような帰結に辿り着くのである。具体的に言えば、彼らの思想は常に、ある矛盾した実在のイメージを形成する方向に向かうのである。彼らの多くは、一方ではニーチェやベルクソンなどのいわゆる「生の哲学」の影響の下、人間の意識に先立つ根源的な実在を、絶え間なく生成する動的で創造的な生として描き出そうとする傾向を持ってい

1　*Франк С.Л.* Предмет знания. Душа человека. СПб. 1995. С.39.

2　フランクとベルクソンの関係を比較的詳細に扱った研究には以下のようなものがある。Hilary L. Fink, *Bergson and Russian Modernism*, 1900-1930 (Evanston, Illinois: Northwestern University Press. 1999); *Евлампиев И.И.* История Русской метафизики в XIX-XX веках. Русская философия в поисках Абсолюта. Ч.1-2. СПб., 2000.

3　その論文は、「全一体におけるイデア的なものと時間的なもの：セミョーン・フランクの『知識の対象』におけるフッサールとベルクソン」という題名で、『スラヴ研究』62号、2015年（スラブ・ユーラシア研究センター）に掲載予定である（ページは未定）。

る。しかし他方では、彼らは生の哲学がそうした実在を盲目的に生成し続けるだけのカオスと見なすことを批判し、意識化以前の実在を、時間を超えて同一的であり続けるようなイデア的なコスモスとしてイメージしようとする。彼らは、一方では実在を時間的、動的な生成の流れと見なしておきながら、他方では同じ実在を、時間を超えた永遠に不動の存在と見なそうとするである。

彼らの思想がそのように方向づけられてしまうのは、おそらく、動的で創造的な原初の実在と、人間の意識がそこに投影する静態的な秩序という対、カント的に言えば、物自体と現象界の対が、彼らにおいては、ロシア的な荒々しい生命の世界と、それを抑圧する西欧近代の形式的な秩序の世界という対に、無意識のうちに重ね合わされてしまうからである。ロシアの思想家にとっては、経験的な世界の向こう側に見出される実在は、ロシアのイメージと重ね合わされているのであり、そうである以上、そうした世界は、一方では、西欧化＝近代化された現在の現象界を再編するだけの破壊力や創造性を持たなければならないのと同時に、他方では、それは単なるカオスであってはならず、人間的で恣意的な秩序とは異なる、神的で超越的な秩序を備えたコスモスでなければならないのである。ロシア・ルネサンスの時代の思想は、実在をそのようなものとして描こうとする潜在的な志向に導かれている。だから彼らの思想は、論理的な飛躍や矛盾を犯しながらでも、実在に時間性とイデア性という二つの矛盾した性格を同時に帰属させようとする方向に向かうのである。我々がこれまでの研究で明らかにしてきたのは、そのようなことであった。

そして、前回の論文では、これと同じことが今回の研究対象であるフランクについても言えることを明らかにした。フランクの思想もやはり、同時代の思想と同じような志向に促されており、同じような実在概念に辿り着いている。しかし、これも前回の論文で指摘したことだが、フランクの思想には他の思想家たちとは異なった特徴がある。それは、他の思想家たちが生の哲学の影響下に時間的な生成の方から出発するのに対して、フランクはフッサールの現象学の枠組を用いて思考を展開しており、そのためフッサールの哲学と結びついたイデア的なものの方から出発しているということである。つまり、ロシア・ルネサンスの思想は時間的な生成と時間を超えたイデアを結びつけようとする共通の傾向を持っているが、他の思想家たちが生成の方から出発して、そこにイデアを結びつけようとする経路を通るのに対して、フランクは逆にイデアの方から出発して、そこに時間的な生成を結びつけようとする逆の経路を通るということである。しかし、どちらの経路を取ろうと、ロシア・ルネサンスの思想は最終的には同じように矛盾した実在のイメージに辿り着くのであり、彼らの思考を導く潜在的な志向がそれだけ強力に彼らの思想に作用を及ぼしていると

いうことである。

さて、以上のように、我々は前回の論文でフランクの思想にも同時代の思想と共通する特徴が見られることを明らかにしたわけだが、その過程で、我々は主にフッサールとベルクソンの哲学との関係でフランクの思想を解読することを試みた。我々が明らかにしたのは以下のようなことである。つまり、フランクがフッサールへの直接的な参照を行わないまま、その枠組を利用して思考を展開させていること、しかしフッサールとは違って、フランクがいわゆる超越論的還元を行わず、意識の外に実在を想定したまま現象学的な思考を進め、フッサールが純粋意識の内に見出したものを実在の領域に見出そうとしていること、さらに、フランクがベルクソンの時間論を独自に解釈した上で援用し、静態的なフッサールの純粋意識を時間化しようとしていること、そしてそれによって、フランクが実在を、世界の可能的な現われのすべてを潜在的に含み、それゆえに時間性とイデア性のいずれをも潜在的な可能性として含んでいるものとしてイメージしていること、そうしたことを明らかにした。

今回この論文によって行うフランク研究は、こうした前回の論文を受け継ぐ形で行われるものである。問題は、前回の論文ではフッサールの現象学との関係でフランクの思想を読み解くことに重点が置かれていたため、ベルクソンとの関係が十分に検討しきれていないことにある。上にも述べたように、ロシア・ルネサンスの思想は論理の自然な流れに逆らってでも二つの対立する契機を結合しようとするため、彼らの思想には不可避的に矛盾や飛躍が含まれてしまうことになる。我々はこれまでの研究でもさまざまな思想家の思想にそうした矛盾や飛躍を指摘してきたが、前回の論文で扱ったフランクの思想に関しては、それがフッサールの思考を決定的に異質な方向へと撓めていることは明らかにしたものの、それがベルクソンの哲学に対してどのような関係にあるのかについては十分な検討を行うには至らなかった。

後に確認するように、フランクのベルクソン解釈はたしかに独自な解釈ではあるものの、一見したところ逸脱やずれを含んでおらず、ベルクソンの論理から外れていないように見える。しかし、フランクが時間的なものとイデア的なものを結合するというロシア・ルネサンスに特有の矛盾した試みを行っている以上、彼のベルクソン解釈にもどこかに矛盾や飛躍が含まれているはずである。今回の論文では、フランクによるベルクソン解釈のどこにそうした矛盾や飛躍が含まれているのかを検討しつつ、フランクの思想をより深いところから捉えるように試みたい。

2．プラグマティズム、フッサール、ベルクソン

我々は前回の論文では、フランクの思考がフッサールの超越論的主観性を時間化することを介してフッサールからベルクソンへと移行するような経路を辿っていることを明らかにしたが、本論はそれを受け、フランクの思考は確かにベルクソンに接近していくが、しかし最終的にはやはりそれとの間に決定的なずれを持っているということを明らかにすることになる。そのため、本来なら、前回の論文の内容をここで要約しておくべきなのだが、しかしフランクの緻密な議論を要約するには相当の紙幅が必要になるし、また前回の論文との過剰な重複も避けがたくなる。そのため、本論では前回の論文を要約するというやり方ではなく、それとは違ったやり方で前回の論文で取り上げた問題の要点をまとめることを試みたい。

具体的には、本論ではフランクのプラグマティズム論に目を向けようと考えている[4]。なぜプラグマティズム論なのかと言うと、フランク自身も「プラグマティズムはイギリス経験論の嫡子である」と述べているように[5]、プラグマティズムがイギリス経験論とつながりを持つ思想動向だからである。そのことが重要なのは、我々が問題にしているフッサールやベルクソンもまた、経験論の伝統と無関係ではないからである。しかし、フランクはプラグマティズムに関しては、それを伝統的な経験論の徹底化と見なした上で、その帰結として現れる唯名論や心理学主義や相対主義などの傾向を批判しているのに対して、同じように経験論と結び付いているにもかかわらず、フッサールやベルクソンに対しては明らかにそれとは異なる態度を取っている[6]。フランクにとっては、フッサールやベルクソンは経験論を基盤としながらも、それを徹底化するプラグマティズムとは違い、そこからはみ出すものを持っていたのである。そしてその経験論をはみ出すものこそが、『知識の対象』において自らの認識論を構想する際に、フランクがフッサールやベルクソンに求めていたものだということになる。本論では、プラグマティズム論の検討という迂回路を通ることで、前回の論文で我々が明らかにしようとしたこと、つまり、フランクが『知識の対象』でフッサールから始めてベルクソンへ移行することで何をしようとしていたの

4　プラグマティズムに関連するフランクの論文には次のようなものがある。*Франк С.Л.* Прагматизм как философское учение // Русская мысль. 1910. №.5. С.90-120; *Франк С.Л.* Прагматизм как гносеологическое учение // Новые идеи в философии. 1913. №7. С.115-157; *Франк С.Л.* Философия Религии В.Джемса // Русская мысль. 1910. №.2. С.155-164; *Франк С.Л.* Виллиам Джемс // Русская мысль. 1910. №.10. С.219-221.

5　*Франк С.Л.* Прагматизм как философское учение. С.101.

6　プラグマティズム論の中では、フッサールやベルクソンについては詳細に論じられていないが、彼らの哲学に対する簡単な言及からでもこのことは伺える。本論の註10と、注14を参照。

かを近似的に捉え直してみることにしたい。

2.1. プラグマティズムの真理観

では、まずはフランクのまとめに従いながら[7]、プラグマティズムと呼ばれる20世紀のアメリカ思想がどのような思想であったのかを確認することから始めよう。プラグマティズムには多様な側面があるが、その傾向をもっともよく特徴づけるのは、おそらくその真理観であろう。フランクに従うなら、プラグマティズムは19世紀の科学万能主義に対する反動として生じた動向であり、真理の客観性や普遍妥当性を否定することを特徴としている。プラグマティズムに従えば、何が真理で何が虚偽かは人間の実践的な生に先立って、それとは無関係にあらかじめ決まっているわけではない。人間の生にとって有用なものが真理とされ、有用性のないものが虚偽とされる。例えば、「道に迷った旅人にとっては、彼を家に連れて行ってくれる理念が真理である」[8]。その理念が真理であるのは、それが旅人の役に立つからなのであって、旅人の必要とは無関係に、常に、誰にとっても真理であり続けているわけではない。同じことは、客観的な真理とか科学的な真理と見なされているものにもあてはまる。たとえば幾何学上の真理のようなものであっても、人間の必要性と関わりなく真理として成立しているわけではなく、あくまでも人間の生に役立つ限りで真理として経験されるのである。それが客観的な真理であるかのように思えるのは、それが主観的な真理と比べて質的な差異を持っているからではなく、ただ比較的多くの人によって、また比較的長期間にわたって有用だからということでしかない。そうした程度の差はあるものの、質的に言えば、どんな真理も人間の実践的な生を離れて客観的に存立するものではなく、人間の生が必要とする限りで、またその必要に応える有用性を持っている限りで真理になる。だから、ある時に真理であるものが別の時には虚偽になったり、ある者にとって真理であるものが別の者にとっては虚偽になったりすることもありうるし、それはプラグマティズムの真理の概念には矛盾しないのである。

プラグマティズムの真理観は以上のようなものだが、フランクはプラグマティズムのこうした相対主義的な傾向を、イギリス経験論の不可避の帰結として性格付ける。経験論は、あらゆる知識は経験に由来すると考え、経験に与えられていないものは人間による主観的な構成物にすぎないと考える。そのた

7　ここでは主に以下の二論文を参照している。*Франк С.Л.* Прагматизм как философское учение; *Франк С.Л.* Прагматизм как гносеологическое учение.

8　*Франк С.Л.* Прагматизм как гносеологическое учение. С.136.

め、バークリーがそうであるように、いわゆる一般概念のようなものの客観性は否定されることになるし、ヒュームがそうであるように、われわれが経験的な所与に基づいて常に想定している「実体」や「因果関係」も、それ自体は経験には与えられていないので、やはり客観的な事実ではなく、主観の恣意的な構成物にすぎないと考えられる。こうした経験論の立場は、フランクによれば、プラグマティズムにも継承されている。プラグマティズムにとってもまた、経験に与えられたものだけが確実な事実であり、経験的な所与を越えて想定されてしまうもの、一般概念や実体や因果関係などは人間心理に由来するのであって、人間の心理とは独立に成立している客観的な事実ではないのである。

しかし、フランクによれば、プラグマティズムは経験論の立場を継承しているだけではなく、それを徹底化させてもいる。経験論は、たしかに知識が経験だけから作られると主張しているが、この主張がもたらす帰結を突き詰めて考えていないのである。知識が経験だけから作られるとすれば、経験が個人的なものである以上、知識が個々人の主観的な確信を越えた客観性や普遍妥当性を持つことはありえないはずである。したがって、プラグマティズムが言う通り、客観的で絶対的な真理は存在しないはずなのである。しかし、経験論は自らが立てた原理から帰結するはずのこうした事実を直視していない。あたかも普遍的な知識が可能であるかのように、そのような知識を想定したような議論を行っている。経験論は自らの原理に一貫して従ってはいないのである。それに対してプラグマティズムは、経験論の原理から不可避的に帰結するはずの事実、つまり客観的な真理の不在という事実を躊躇なく明るみに出し、経験論の立場を徹底化し、その原理を一貫して展開させているのである。

フランクによれば、現代の認識論の多くが経験論的な原理に立脚しながら、そこから必然的に帰結するはずのことを曖昧にしたままにしている。それと比べると、プラグマティズムは経験論の原理を貫徹させ、人間の生の必要性という実践的な原理を導入することで人間の認識を一貫した論理で説明している。そうした点で、フランクはプラグマティズムを評価する。現代の認識論は真理を有用性という観点から説明しようとするプラグマティズムの理論を奇妙な理論として退けるのでなく、それが明らかにしたことを真剣に受け止め、客観的な真理が経験論的な基盤の上でいかにして確保されるのかを、もう一度原理的に考え直さなければならない。プラグマティズムは現代の認識論にそうした問題提起を行っているのである。

2.2. 志向性と記憶

フランクはプラグマティズムをこのように捉えているが、こうしたプラグマ

ティズム論を下敷きにすれば、フランクがなぜフッサールやベルクソンに目を向けたのかが理解される。フランクは、経験論の立場を継承する現代の認識論は、客観的な真理が成立する根拠を原理的に再考しなければならないと考えているが、フッサールやベルクソンの哲学は、フランクにとってはまさにそうした試みにほかならないのである。

フッサールの現象学については、おそらくそのように考えても間違いではないだろう。経験論が経験的な所与だけから知覚を説明するのと同じように、フッサールも意識に直接与えられたもの（意識の実的成素）に基づいてわれわれの経験の成り立ちを説明しようとする。そうした点でフッサールの現象学は経験論的だと言える。しかし、フッサールの現象学には古典的な経験論からはみ出す要素がある。それは「志向性」の概念である。ヒュームが明らかにしたように、我々の意識に与えられるのは多様な現われだけであり、それらの元になっていると想定される「実体」、あるいはフッサールの言い方で言えば「対象」は、意識に直接的には与えられない。それらは与えられた現われに基づいて我々が独断的に想定しているものでしかない。だからヒュームはそうした疑わしいものを排除して与えられた現われだけで知覚を説明しようとするのである。

それに対してフッサールは、「対象」や「意味」（経験論が唯名論的な立場から否定した「一般概念」に相当するイデア的な本質）は、たしかに意識に直接的には与えられていないが、「志向的内在」というやり方で意識にもたらされるのだと考える。意識に直接与えられるのは現われだけだが、そうした現われに基づいて、我々の意識の内には対象や意味に対する志向が生じ、そうした志向を充実させるものとして対象や意味が意識に内在してくるということである。ヒュームは実体に収束せず、因果関係で結合されていない多様な現われの無秩序な流れを想定するだけだが、フッサールはそうした意識の経験的な流れには解消されないもの、つまり「対象」や「意味」が、志向的内在というやり方で意識にもたらされると考えるのである。この点で、フッサールの現象学は古典的な経験論の範囲をはみ出しており、経験論やその徹底化であるプラグマティズムとは根本的に異質なのである[9]。

こうして見れば、フランクがフッサーに注目する理由はよくわかる。フッ

9　フッサールは次のように言っている。「もしヒュームの感覚主義が彼をして《についての意識》という志向性の全領域に対して盲目にしなかったならば、もし彼がこの志向性の全領域を本質探究として取り入れていたとしたならば、彼は偉大な懐疑主義者ではなくて、むしろ理性に関する真に《実証的》〔積極的〕な理論の樹立者となっていたであろう」。E．フッサール（佐竹哲雄訳）『厳密な学としての哲学』岩波書店、1969年、65ページ。

サールは志向性という概念を導入することで、対象や意味といった経験に由来しないもの、イデア的なものに目を向けており、それによって経験論の論理から逸脱して客観的な真理が成立する可能性を指し示しているのである[10]。すでに述べたように、ロシア・ルネサンスの思想は根源的な世界をイデア的なコスモスと見なそうとする強い志向を持っているが、世界をそのようなものとして思い描くには、世界には相対的でしかない人間的な経験をはみ出す何かが備わっているのでなければならない。フランクにとってフッサールは、志向性という概念によって世界にそのような要素を想定する可能性を示唆した哲学者という意味を持っていたのである[11]。

以上のように、フッサールに関しては、それがプラグマティズムとどのような差異を持っているのか、したがって、経験論の帰結であるプラグマティズム的なものを乗り越えようとしていたフランクがそこに何を見ていたのかを推測することはそれほど困難なことではない。しかし、もう一方のベルクソンについてはどうか。ベルクソンの場合にもフッサールの場合と同じことが言えるのか。というのも、後で確認するように、ベルクソンはフッサールとは違って、時間を超えて普遍的に妥当するようなイデア的なものを否定的に捉えていたし、ベルクソンの思想は一般的にはプラグマティズムに対立するものとしてではなく、むしろプラグマティズムと共通性を持つものと見なされているからだ。そればかりか、ベルクソンはプラグマティストのジェイムズと個人的な親交があり、彼ら自身が互いの思想の近さを認め合っていたという事実さえある[12]。ベルクソン自身の考えに従う限り、彼の哲学はフッサールではなく、むしろプラグマティズムに近いと考える方が自然なのである。では、経験論の限界を超えようとしていたフランクは、なぜフッサールとともにベルクソンに目を向けるのか。彼はベルクソンの内に何を見ようとしていたのか。

そのことは、ベルクソンが『物質と記憶』で展開している知覚の理論を、上に見たプラグマティズムやフッサールの理論と比較すると理解できるように思

10　フランクはプラグマティズムに対抗しうる真理の理論を探求した哲学者としてソロヴィヨフの名前を挙げるとともに、現代においてはフッサールが同じことを試みていると指摘している。*Франк С.Л.* Прагматизм как философское учение. С.116.

11　人間的な経験をはみ出す要素が世界に備わっていると考えるためには、意識に志向的に内在してくるもの（対象や意味）が意識の外に実在していると考えなければならない。しかし、フッサールの現象学は純粋意識の外に実在を想定しない。フランクがフッサールの志向性の概念を評価するとともに批判するのはこのためであり、フランク自身は超越論的還元（エポケー）を行わないまま、したがって意識の外に実在を想定したまま現象学的な分析を進めることになる。この点については、拙論「全一体におけるイデア的なものと時間的なもの」を参照。

12　ベルクソンとジェイムズの関係については、三橋浩『ジェイムズ経験論の周辺』法律文化社、1986年を参照。

われる。ベルクソンによれば、われわれの知覚には常に記憶が関与しているが、彼は知覚のメカニズムを明らかにするため、あえて記憶が関わらない状態の「純粋知覚」というものを想定する。ここでその詳細を説明することはしないが、われわれにとって重要なのは、純粋知覚が我々の身体の利害関心によって成立するものとされていることである。ベルクソンの哲学がプラグマティズムと結びつけられるのも、彼の知覚の理論に我々の身体の利害関心という人間的な生の欲求に由来するものが関わっているためだと考えられるが、ベルクソンの認識論がこの純粋知覚に尽きるのであれば、それは経験論＝プラグマティズムの原理を外れていないことになるだろうし、したがってフランクがベルクソンに注目することもおそらくなかっただろう。しかし、すでに述べたように、純粋知覚は実際の知覚から記憶を抜き取ることで仮構された理論上の抽象物である。逆に言えば、具体的な知覚には常に記憶が伴っている。すでに明らかだろうが、この記憶こそが経験論の原理からはみ出すものなのである。フランクは身体レベルでの知覚に外側から入り込んでくるこの記憶という要素と、フッサールが意識に直接的にではなく、志向的なやり方で内在すると見なしたものとを、おそらく類比的に捉えている。フランクにとってベルクソンの理論が経験論やプラグマティズムと区別されるのは、そしてフッサールの現象学と同じ価値を持つものとして認められるのは、ベルクソンの認識論にこの記憶という要素が関わってくるためなのである。

それゆえに、われわれが問題にすべきなのもこの記憶である。フランクがベルクソンに注目する理由もこの記憶にあるし、さらにはフランクの思想がベルクソンからずれてくる原因もこの記憶の解釈にある。しかし、記憶を検討する作業は、もはや本節の関心からは独立した問題となるので、節を改めて行うことにしたい。しかし節を改める前に、われわれは本節の問題であるプラグマティズムに関連して、それと関わるもう一つの問題に目を向けておくことにしたい。プラグマティズムを媒介にすることによって上で考察したのは、フランクにとってフッサールとベルクソンが持つ意味が重なり合っているということであった。今度は逆に、プラグマティズムを媒介にすることで、両者がフランクにとって異なる意味を持っていることを明らかにしておこう。

2.3. イデアと生

フランクがプラグマティズムの一貫性や徹底性を評価していることはすでに指摘したが、それとは別の点でもフランクはプラグマティズムに高い評価を与えている。それは、プラグマティズムが人間的な生やその必要性とは切り離された抽象的な知識を否定し、「生きた知識あるいは全的な知識、知識＝理論に対

する知識＝生とでも呼びうる」ものを提起したことに対する評価である[13]。ここに出てくる「生きた知識」や「知識＝生」といった概念は、『知識の対象』の結末近くにも出てくる概念であり、フランクが自らの最終的な立場を名指す時に用いる言葉である。すでに述べたように、ロシア・ルネサンスの思想は時間的な生成と時間を越えたイデアを矛盾的に結合しようとする志向を持っているが、この「知識＝生」の概念も、時間を越えて妥当するイデア的な「知識」と、時間的に生成する動的な「生」の概念を組み合わせて作られたものであり、まさにフランクの思想の最終的な到達点を名指す言葉なのである。フランクはその言葉を用いてプラグマティズムを評価するのである。

フランクはなぜそのような高い評価をプラグマティズムに与えるのか。それは、フランクがフッサールの内に経験論をはみ出すイデア的なものを見ていたのだとすれば、逆に彼はプラグマティズムの内にはフッサールには見いだされないもの、つまり知識や真理を完結し固定されたものとしてではなく、時間的に生成する動的で創造的なものと見なすような観点を見出していたからである。プラグマティズムにおいては、真理も世界も、常に同一であり続けるような絶対的、客観的なものではない。それらは人間の生の必要性に合わせて常に変化し、流動するものとしてイメージされている。フランクはこのように世界を動的なものと見る点でプラグマティズムを肯定的に評価するのである。しかし他方で、プラグマティズムにおいては、その動的な世界は人間の必要性に合わせて盲目的に変容するだけの単なるカオスにとどまっており、フランクはその点でプラグマティズムを批判するのである。

こうしたことを考えると、フランクにとってフッサールとプラグマティズム、さらにはベルクソンが、相互の関係の中でどのような意味付けを与えられているのか、おおよそのところが理解できると思われる。まずはプラグマティズムに関して言えば、そこには動的な生成はあるが、イデア的な秩序がない。それが象徴するのは、イデアなき生成である。その相対主義を克服するためにフランクはフッサールに目を向けるわけである。しかし、逆にフッサールにはイデアはあるが、生成がない。フランクにとってフッサールは、生成なきイデアを象徴する。ではベルクソンはどうか。言うまでもなく、ベルクソンはイデアと生成の結合を象徴する。フランクにとってベルクソンは、プラグマティズム的な生成とフッサール的なイデアとの高次の次元での統合の象徴なのである。フランクはプラグマティズムが生きた知識を志向すると述べた後、註で以下のように記している。「この点でプラグマティズムはベルクソン哲学の構想と接触

13　*Франк С.Л.* Прагматизм как гносеологическое учение. С.153.

する。しかしこの関連で指摘しなければならないが、ベルクソンの「直観主義」は単なる唯名論とはまったく別のものである。ベルクソンが抽象的な知識に対立させるのは、具体的な感覚的な現実ではなく、意識総体の流動する内容である」[14]。つまり、プラグマティズムとベルクソンはいずれも世界の動的な性格、その生成の側面に目を向けているが、プラグマティズムは「単なる唯名論」でしかなく、一般般概念、つまりイデア的な本質を認めないのに対して、ベルクソンは「単なる唯名論」ではない。つまり、ベルクソンは世界を動的に捉えるのと同時に、そこにイデア的な本質が備わっていることをも認めているということである。プラグマティズムには生成はあるが、イデアがない。それに対してベルクソンには、生成と同時にイデアがあるということである。フランクはロシア・ルネサンスの思想が潜在的に求める生成とイデアの矛盾的な結合を、ベルクソンの内に見出しているわけである。

しかし、ベルクソンの内にプラグマティズム的な生成を見ることは通常のベルクソン理解に適合しているが、ベルクソンの内にイデア的なものを見出すことは通常のベルクソン理解に明らかに反している。ベルクソンは世界の根源に時間を越えた永遠に不動のイデアを見出すプラトニズム的な傾向を自分の立場に対立するものと見なしていたからである[15]。プラトニズムは不動のイデア的存在を真実在と見なすとともに、時間的に生成する世界をその不動の世界の派生的な現われにすぎないものと見なしていた。それに対してベルクソンは、それを逆転させるように、時間的に生成する世界の方を真の実在の姿と考え、逆に永遠に不動のものとしてイメージされた世界の方を、人間的な錯覚に基づく派生的な現われと見なしている。フランクはベルクソン哲学をイデアと生成の統合の象徴として捉えているが、ベルクソン自身は明らかに自らが生成の側に与していると考えていたのである。では、フランクは何を念頭においてベルクソンの内に生成とともにイデア的な要素があると考えるのか。それを明らかにするには、先ほどの記憶の問題を考えなければならない。先ほど引用した個所でフランクは、「ベルクソンが抽象的な知識に対立させるのは、具体的な感覚的な現実ではなく、意識総体の流動する内容である」と述べていたが、この「意識総体の流動する内容」というのがまさに記憶である。フランクは、この記憶の内に、「具体的な感覚的な現実」とは異なるもの、つまり経験的な現われには解消されないイデア的なものの成立可能性を見ているのである。われわれはこ

14　*Франк С.Л.* Прагматизм как гносеологическое учение. С.153.

15　「思考の映画的メカニズムと機械論的錯覚」と名付けられたベルクソンの『創造的進化』第四章を参照。

こで節を改めて、次節でこの記憶の問題を考えることにしよう。

3．記憶とイデア

3.1. 時間への展開と時間の圧縮

今も指摘した通り、ベルクソンはプラトニズムのように、時間を超えて同一であり続けるものではなく、逆に絶え間なく生成し変化し続けるものをこそ根源的な実在と見なすのだが、彼はそうした生成変化の流れを「持続」と呼ぶ。われわれがこれから問題にする記憶もまた持続である。では持続とはどのようなものなのか。ベルクソンがよく用いるメロディーを例として簡単に説明しておこう[16]。我々は、メロディーは多数の音から成り立っていると考える。実際、メロディーを分析すればそこから多数の音が取り出される。しかし、メロディーが多数の音から成り立っているのはたしかだが、それらの音をただ寄せ集めただけではメロディーにはならない。メロディーはそれぞれの音が前後の音と融合し、それらの連なりが一つの連続的な流れとなった時、その流れの中から新たな質として初めて生じるものである。このメロディーの例に見られるように、持続はそれを構成する諸要素が機械的に並置され、空間上に、いわば横に並んで広がっていくようなあり方をするのではなく、諸要素が互いに融合し、一つの連続体となって時間の中を流れていくようなあり方をするものである。そしてその流れの中から、その流れを構成する諸部分の総和からは生じることがないような新たな質を生み出す創造的な流れなのである。

ベルクソンの考える記憶もそのような持続である。ベルクソンのいう記憶は、我々が普通に考えるような記憶とは性格が異なっている。我々の考える記憶は、現在の印象が劣化することによって生じるものであり、その劣化がさらに進むと忘却され、消えてしまうものである。しかし、ベルクソンのいう記憶はそのように現れては消えてしまうようなものではない。それは、新たな経験を次々に取り込みながら、そのすべてを保存し、時間の経過とともにその容量をますます増大させていくような性質のものである。ベルクソンの記憶は、メロディーと同じように、残存する古い要素に新たな要素が次々に加わり、それらが融合することで形成される一つの連続的な流れであり、新しい記憶が加わるたびに、記憶の総体は新たな全体へと再編され、その姿を変えていくことになる。記憶もまた、時間の中を流れていく生成変化の流れであり、その流れの

16　ベルクソン（合田正人、平井靖史訳）『意識に直接与えられたものについての試論』ちくま学芸文庫、2002年、116ページ、ベルクソン（矢内原伊作訳）「変化の知覚」、『思想と動くもの』白水社、1965年、189ページなど。

中から新たな質を生み出していく創造的な流れである。

ここでフランクに話を戻そう。彼はこうした生成変化の流れとしての持続の内に、生成とイデアの高次の統一を見出そうとするのである。しかし、上で行った説明からも明らかなように、持続はやはり時間的に生成するものであって、イデアのように時間を越えて不動であるものとは対立していると考えるのが普通だろうし、ベルクソン自身もそのように考えていた。では、フランクはこの持続のどこに時間を越えたイデア的な要素が含まれていると考えるのか。

問題は、フランクが行う持続の独自な解釈にある[17]。フランクによれば、ベルクソンは持続を時間的なものだと考えているが、実際には持続は純粋に時間的なものではない。純粋に時間的なものは、フランクに従えば、絶え間なく生成し、そして消滅することを繰り返すような生成消滅の流れである。しかしベルクソンの言う持続は、上に見た通り、現れては消えていくような流れではなく、現れたものが消えることなく残存し、古い要素が新たな要素を取り込みながら、その総体が次第に増大していくような流れである。持続がこのような性格の流れであるのは、フランクによれば、持続の内に純粋な時間の契機、生成消滅の契機とともに、それとは別の契機、流れていく多様な諸要素を残存させ、それらをひとつの全体へと統合するような契機が備わっているからである。そうした統合の契機があるがゆえに、持続は多様な要素を含みながらも一つの流れとしてのまとまりを持ちうる――フランクはそのように考えるのである。そして、持続に備わるそのような統合の契機こそが、持続を生成であるのと同時にイデア的なものにもしている当のものなのである。

我々がまず確認しておかなければならないのは、フランクが自らの実在の概念を上に見たような持続をモデルとして形成していることである。われわれが前回の論文で明らかにしたところに従えば、フランクは意識に先立つ実在、より正確には、意識とその対象が分離する前の主客が未分化の世界、そういう意味で意識に先立つ根源的な実在の世界を、「絶対的存在」あるいは「全一体」と呼んでいるが[18]、この全一体という実在に、フランクは持続と同じような性格を与えているのである。上に見たように、持続は、それを構成する諸要素が他の諸要素との間に明確な境界を持たず、互いに融合しあって未分化状態の連続体をなしていたが、フランクのいう全一体もそれと同様に、それを構成する諸

17　以下で紹介するフランクによる持続の解釈については、*Франк С.Л.* Предмет знания. С.303-309. を参照。

18　前の論文でも指摘した通り、「絶対的存在」という用語はフッサールが純粋意識に対して用いているものである。フランクはそれに対抗するように、意識を含む根源的な実在を「絶対的存在」と呼ぶのである。

要素が互いに融合しあいながら未分化状態で構成している全体である。ベルクソンの言い方で言えば、「量的多様体」としての全体ではなく、「質的多様体」としての全体である[19]。

また、ベルクソンは持続としての記憶を、これまでに経験された世界の現われのすべてを潜在化した状態で含んでいるものと見なしていたが、それと同じように、フランクも全一体という根源的な実在の内には、世界を構成するすべての現われが潜在化した状態で含まれていると見なしている。フランクはこのように、意識化以前の実在、つまりは全一体を、ひとつには、世界の可能的な現われのすべてを潜在的な状態で含んでいるような全体として、また二つ目には、そうした無数の現われが互いに明確に分節化されないまま未分化の状態で形成しているような全体としてイメージしている。フランクの実在のイメージは、明らかにベルクソンの持続のイメージと重なり合うようなやり方で形成されているのである。

しかし、諸要素が未分化状態にあるこの潜在的な世界は、そこから意識が自立的なものとして分離し、意識とそれ以外の世界に分裂して、意識が自己の外にある世界を対象として認識するようになると、潜在的な世界に意識の光が当てられて分節化のプロセスが始まり、それは顕在的な世界へと変容していくことになる。潜在的な世界のこの顕在化は、フランク自身がはっきりと述べているわけではないが、われわれがフランクのテクストを解釈したところに従えば、二通りのやり方で行われると想定されている。一つには、意識が未分化の世界に順次注意を向け、そこに含まれる諸要素、つまり世界の多様な現われを順番に顕在化させていくようなやり方である。これは潜在的な状態で与えられた現われの多様を時間の流れの中に展開させながら顕在化させるようなやり方だといえる。しかし他方では、意識は潜在的なものを時間的に展開するのではなく、逆に時間を圧縮するようなやり方で顕在化させることもできる。全一体は、先ほど見たように、世界の現われのすべてを潜在的な状態で含むものである。莫大な量の現われを含むこの全体を、いわば二次元の平面に投影するように、そこから時間の流れを抜き取るようにして圧縮すれば、全一体の中に含まれていた多数の類似した現われが一つに取りまとめられ、具体的な現われの多様を越えて同一的であり続けるようなイデア的な本質が析出されてくるはずである。これが全一体を顕在化させるもう一つのやり方である。世界の現われのすべてを含む全一体は、このように、それらの現われを順番に意識化していくという

19　ベルクソン（合田正人、平井靖史訳）『意識に直接与えられたものについての試論』ちくま学芸文庫、2002年、90-106ページ、参照。

時間的に展開させるやり方でも顕在化させることができるし、逆に時間を圧縮して時間の幅を持たない抽象概念を取り出すようなやり方でも顕在化させることができる。フランクはおそらくそのように考えていたと思われる。

そして、フランクはおそらく、ベルクソンの持続に関しても同じように考えることで、そこに時間的な生成の契機とともに、イデア的な契機が含まれていると考えるのである。持続にせよ全一体にせよ、いずれも莫大な量の多様な要素を自己の内に潜在化した状態で含んでいる。それを時間的に展開させるようなやり方で顕在化すれば、現れては消える生成消滅の流れが生じることになるが、逆に時間を圧縮するようなやり方でそれを顕在化すれば、そこから時間を越えて同一的であるようなイデア的な本質が析出されてくることになる。このように考えれば、たしかに、持続は時間的な生成の流れとともに、時間を越えて同一的であり続けるようなイデア的な本質を潜在的な可能性としてその内に含んでいると考えることができるのである。フランクはおそらくこのようなやり方でベルクソンの持続の概念を解釈し、そこにイデア的なものと時間的なものが共存していると見なすとともに、それをモデルとして全一体という自己の実在概念を形成しているのである。

3.2. 志向的内在と記憶の圧縮

我々は、このことをさらに認識論の場面に戻って考えておこう。フランクがフッサールやベルクソンに目を向けるのは、彼らの理論に経験論やプラグマティズムの範囲をはみ出すものがあったからだった。経験論は、意識に直接与えられる多様な現われしか認めない。ヒュームのいう実体あるいはフッサールのいう対象は、それらの多様な現われが一つにまとまって統一を形成しなければ成立しないが、そうした統一はわれわれの意識には与えられていない。だから経験論においては、対象や実体は主観の恣意的な構成物として否定され、現われの無秩序な多様のみが意識の与件として認められるのであった。それに対してフッサールは、そうした現われの多様を超えるものに目を向けている。つまり、対象や意味など、意識に直接的には与えられていないものの、志向的に内在するというそれとは別のやり方で意識にもたらされるものに目を向けているのであった。フッサールは志向性という概念によって、現われの多様だけしか認めない経験論の範囲をはみ出すもの、つまりイデア的なものを認識論に導入しているのであった。

こうした志向的内在というフッサールの考え方は、先ほど見たフランクの考え方、潜在的な全一体が二通りのやり方で顕在化してくるというフランクの認識論的な考え方と、必ずしも無関係ではないように思える。全一体は世界のあ

らゆる現われを含んでいるが、意識はその全体を顕在化した状態では一気に捉えることができない。だから、一方では意識はそれを時間の流れの中に展開し、その諸部分を順番に捉えていくようなやり方で顕在化させることになる。しかし、このようなやり方で捉えられるのは、経験論が言うように、現れては消えていく多様な現われの無秩序な流れでしかない。しかし、意識はそれとは別のやり方でも潜在的な全一体を顕在化させることができる。それは全一体に含まれる現われの多様を時間的に圧縮し、同一的な本質を抽象的に析出するようなやり方である。フッサールに即して言えば、そのようなやり方で析出されたものこそが、イデア的な本質としての「意味」であり、そうしたものが、意識に直接的に与えられる多様な現われとは別のやり方で、つまり志向的に内在するというやり方で意識にもたらされるものだということになる。全一体が二通りのやり方で顕在化してくるというフランクの考え方は、意識に直接与えられているものと志向的に内在してくるものというフッサールの区別に、実はかなりの程度重なり合っているのである。

同じことはベルクソンの知覚に関しても言える。ベルクソンにおいて知覚は、我々の身体の利害関心に基づいて形成される純粋知覚が元になり、そこに記憶が結びつくことで成立するものであった。我々の身体は、自身の利害関心に基づいて周辺にある存在のいくつかを前景化させ、それ以外のものを背景に沈めることで、濃淡のない一様な世界を地と図に分化させるようにして知覚世界を作り出していく。そしてそれによって背景から浮き上がってきたもの、つまり知覚されたものに記憶が結びつくことで具体的な知覚が成立する。過去の現われのすべてを保存する莫大な量の記憶の中から、知覚されたものに関連する記憶だけが潜在状態から呼び戻されて顕在化し、身体レベルで知覚されたものを補強するように、そこに付着するのである。

こうしたベルクソンの記憶の考え方が、フランクの考える時間的な圧縮によるイデア的なものの析出という考え方と重なり合うものであることが分かるはずである。ベルクソンの場合、身体による純粋知覚が周囲世界から何か特定のものを浮かび上がらせると、潜在的な状態で蓄えられていた莫大な量の記憶、時間軸上に伸び広がった状態の無数の記憶が圧縮され、類似した現われが統合され、時間を超えて同一的なものとなって知覚の内に入り込んでいくことになる。知覚におけるこうした記憶の機能は、潜在的な現われの集合体の圧縮によるイデア的なものの析出というフランクの考え方に重なるし、またそのように析出されたものが知覚の中に入り込んでくるという考え方は、意識に直接的には与えられないイデア的なものが、志向的内在という形で意識に入り込んでくるというフッサールの考え方にも重なり合ってくることになる。

こうして見ると、フッサール、ベルクソン、そしてフランクが一つの線上で結びついているように見えてくる。経験論が多様な現われの集積しか認めないのに対して、彼らはすべて、莫大な量の現われが圧縮されることで多様な現われを越えて同一的であるものが析出され、それが意識の内に入り込んでくると考える点で同じように経験論の範囲を超えており、その点で同一線上に並んでいるということである。あるいはより事態に即して言えば、フランクがフッサールとベルクソンの理論をそのように解釈し、両者を接合させることで自己の理論を構築しているので、フランクを中心にして見るとそのようなつながりが見えてくるということかもしれない。しかしいずれにせよ、こうしたつながりがあるのだとすれば、ベルクソンの持続の内にもイデア的なものが潜在的に含まれているというフランクの想定は正しいことにならないだろうか。そしてそうだとすれば、持続のうちにイデア的なものを見出すフランクによるベルクソン解釈の方に論理的な飛躍があるのではなく、逆に持続的なものとイデア的なものを対立させるベルクソンの方が、自身の持続の概念を正しく捉えられていないということにならないだろうか。しかし、我々はやはりそうではないと考える。フランクによるベルクソンの持続の解釈には、ある問題がある。そしてその問題が、ベルクソンをフランクやフッサールと同一線上におくような帰結を導いているのだと考える。では、その問題とはどのようなものか。それについては次節で考えることにしよう。

４．プラグマティックな原理と超越論的主観性

何度か指摘しているように、ロシア・ルネサンスの思想は時間的な生成と時間を越えたイデアという対立する二つの契機を高次の次元で統合しようとする傾向を持っているが、こうした矛盾した試みを行おうとするがゆえに、彼らの思想には論理的な飛躍や矛盾が不可避的に含まれてしまうことになる。今問題にしているフランクの場合にも、ベルクソンの持続を独自に解釈することで二つの対立物を統合しようとしているわけだが、そうである以上、彼の思想にもやはり矛盾や飛躍が含まれているはずである。ではそうした論理の破綻はどこにあるのか。一見すると、フランクの思考にはそうした破綻は見当たらず、ベルクソンの持続の内に隠されていたもの、つまり時間の契機とは異なる統合の契機、あるいはイデア的なものを、ベルクソン自身の論理に則って引き出しているだけのようにも思える。フランクが言うように、たしかに持続の内には現われては消えるという生成消滅の流れとは異なる性格、現れたものが消え去らずに残存するという性格があるし、持続としての記憶がその内に世界の現われのすべてを含んでいるならば、それを圧縮することで、時間を越えて同一的で

あるようなイデア的なものがそこから析出されるようにも思える。そうだとすれば、持続としての記憶は、もちろん潜在的なやり方においてではあるが、時間を超えて同一的であるもの、つまりイデア的なものを自らの内に含んでいると言えるのではないか。そうだとすれば、実在は時間的な流れでありながら、同時に潜在的にはイデア的な存在でもあると言えるのではないか。

しかし、われわれはやはりそうではないと考える。先ほども述べたように、フランクの持続の解釈にはやはり問題があるように思うのである。ではその問題はどこにあるのか。彼の解釈のどこに論理的な破綻が含まれているのか。

我々は前に、すべての現われを含む全一体が時間的に圧縮されることで同一的な本質が析出されてくるという事態を、「莫大な量の現われを含むこの全体を、いわば二次元の平面に投影するように、そこから時間の流れを抜き取るようにして圧縮」すると表現したが、問題はここで述べた「二次元の平面」にある。莫大な量の現われを含む記憶や全一体を時間の幅を持たない二次元の平面に投影すれば、時間軸上の様々な点に散らばっていた類似した現われがその平面上で折れ重なり、それらに共通するものが時間を越えた本質として析出されるはずである。しかし、そうした平面、持続を圧縮して投影するためのスクリーンとなるような二次元の平面とは、具体的には何を指しているのか。

ベルクソンの知覚の理論に即して言えば、そのような平面になるのは、我々の身体によって描き出された純粋知覚の世界であることになるだろう。莫大な量を持つ記憶は、われわれの身体が描き出す純粋知覚の世界に付着する時に圧縮されることになる。ベルクソンは身体的な知覚から切り離された記憶、純粋状態にある記憶を「純粋記憶」と呼ぶが、純粋記憶においては、そこに含まれる膨大な記憶は中心化されておらず、弛緩して伸び広がっている。しかし、身体的な知覚によって地と図に分かれた世界が描き出されると、純粋記憶はその身体的な知覚を補強するために、身体が浮き上がらせたものに類似した過去の様々な現われを潜在状態から呼び起こし、それらの記憶を知覚の対象に付着させることになる。つまり、膨大な記憶を含んで伸び広がっている純粋記憶は、身体による知覚、純粋知覚という平面に向かって、そこに投影されるようにして圧縮されるということである。

しかし、このように記憶が純粋知覚という平面において圧縮されるのだとすれば、それによって析出されてくるものは、たしかに多様な現われに共通する同一的な本質であるかもしれないが、しかしそれはフランクが想定するような本質、つまり客観的で普遍的なイデア的な本質にはならないように思える。なぜかと言えば、記憶が投影される平面となる純粋知覚は、前に述べたように、われわれの身体の利害関心に基づいて成立する知覚であるからだ。それは、あ

る身体の任意の時点での利害関心を反映した、その身体に特有の偏りを持った特殊なスクリーンでしかない。このようなものに記憶を投影する限り、そこから析出されてくるのは、任意の時点での任意の身体の利害関心に見合った本質、その身体にとって有用性を持つ本質、約言すれば、プラグマティックな本質でしかないはずである。純粋記憶があらゆる現われを含んでいるならば、それをどのような型枠にはめ込んで圧縮するかによって、結果として出てくる本質は異なったものになるはずである。ベルクソンの場合であれば、そのような型枠になるのは純粋知覚の原理となる身体の利害関心であるが、そうした型枠を用いる限り、そこから成立するのはそれに見合った本質、つまりプラグマティックな本質でしかないはずである。そのような本質は、任意の時点での任意の身体にとって有用なものとして一時的に形成されるにすぎず、身体がその位置や状態を変えれば、すぐにばらばらの現われに解消され、再び記憶の無秩序な集積体の中に回収されてしまうようなものでしかないはずである。フランクはプラグマティズムの相対主義を避けるためにベルクソンに目を向けるわけだが、ベルクソンに基づいて構築した彼の理論は、彼自身の意図に反してプラグマティズムの原理をその内に含んでしまっているわけである。

しかしもちろん、フランクはベルクソンの哲学を解説しているわけではなく、それから独立した自らの哲学を構築しているのだから、それがベルクソンの哲学に逐一合致している必要はない。今の場合で言えば、フランクが全一体を圧縮する際の型枠として、ベルクソンと同じように純粋知覚を想定しなければならないわけではなく、理論的な不整合が生じないのであれば、それとは別の型枠を想定しても構わないわけである。プラグマティックな型枠を用いて記憶を圧縮するからプラグマティックな本質が析出されてしまうのであり、それとは異なる型枠を用いるなら、客観的なイデア的な本質が析出されることもありうるかもしれない。実際、フランクは全一体を投影する平面として、彼自身は明示していないものの、暗黙のうちに純粋知覚とは別のものを想定しているように思える。では、その平面とは何か。本論の範囲内では唐突になってしまうが、それはおそらくフッサールの純粋意識、すなわち超越論的主観性である。

前回の論文の議論を少し振り返っておこう。すでに何度か指摘した通り、フランクは『知識の対象』ではフッサールからベルクソンへという経路を辿って思考を展開させているが、フッサールからベルクソンへというこの移行は、フッサールの超越論的主観性を時間化し、流動化させることによって行われている。フッサールの超越論的主観性、あるいは純粋意識は、時間の流れから切り離され、虚空に浮かんでいるようなあり方をしている。世界に存在するすべてのものは時間の流れの中にあり、生成変化を繰り返しているが、フッサールの純粋

意識は、そうした万物の生成の流れからは切り離されたようなあり方をしているのである。それは、生成変化する世界から離れて、それを外側から観照するための定点のような機能を果たしている。このような定点こそが、時間を超えて妥当するイデア的な知識の成立を可能にする当のものである。しかし、そうしたイデア的な知識は、あらゆる時間的な現われに妥当する普遍性を持つ代わりに、抽象的で静態的な性格を持たざるを得ず、世界に備わる時間的な契機を捉えることができない。フランクはそのような知識を「抽象的な知識」と呼んで批判するとともに、そのような静態的な知識に動的で生命的な性格を与えようとすることになる。そしてそのために彼が行おうとするのが、フッサールの超越論的主観性を時間化しようとすること、言い換えれば、生成する世界を観照するための定点を解体し、そのような定点として機能していた主観性を、すべての存在が巻き込まれている生成の流れの中に投げ込むことであった。観照する側の意識あるいは主観を、観照される側の生成する世界の中に組み込み、生成しつつある生を外側からではなく内側から、世界と融合し、世界とともに生成しながら捉えるような知識、生成する生を内側から生きるような知識が構想されることになる。それが、フランクの言う「生きた知識」あるいは「知識＝生」であり、こうした構想において、フランクの認識論はベルクソンの「直観」の構想に近づくことになる。このようにフッサールの超越論的主観性を時間化することで、ベルクソンの直観と重なり合うような知識、生成する実在を内側から生きるような知識を構想することが、『知識の対象』においてフランクが行おうとしていたことであった。

見られるように、われわれが前回の論文で明らかにしたところに従えば、フランクはフッサールからベルクソンへと移行するのに際して、言い換えれば、静態的なイデアから、それを動態化、生命化させる方向へ向かうのに際して、フッサールの超越論的主観性という観照のための定点をすでに解体しているはずなのである。しかし、その解体されたはずの超越論的主観性が、上に見たとおり、ベルクソン的な記憶の圧縮を考える際に、記憶を投影するためのスクリーンとして再び導入されてくるのである。ただし、暗黙のうちに、いわば密輸的にである。先ほど、超越論的主観性は時間の流れから切り離されて虚空に浮かぶようなあり方をしていると言ったが、今の我々の問題関心から言えば、この主観性は時間の流れから切り離されているだけではなく、人間的な生に固有のあらゆる利害関心からも解放されている。それは、人間的な生の利害関心に基づく偏りを一切持たない無色透明の中立的な主観性である。それは多様な利害関心が交錯する人間的な生から解放されていて、まさに虚空に浮かぶようなあり方をしているのである。全一体を投影するためのスクリーンとして、利害関

心に基づく一切の偏りのないこうした中立的な主観性が想定される限りで、析出される本質がプラグマティックな本質ではなく、普遍的に妥当する客観的なイデア的な本質であると考えることが可能になる。フランク自身は明示していないが、彼は全一体の圧縮を考える際に、おそらく純粋知覚というベルクソン的なプラグマティックな原理を、暗黙の裡に超越論的主観性というフッサール的な中立的な原理にすり替えているのである。フランクはフッサールからベルクソンへ移行する際に超越論的主観性を解体しているはずなのだが、その解体された超越論的主観性が、全一体の圧縮による同一的な本質の析出を考える際に、おそらくはっきりと意識化されないままに復活してくるのである。こうして、フッサールに由来する観照のための静止した定点が、いかなる定点も持たないはずのベルクソン的な持続と曖昧に結びつけられてしまうのである。

フランクの論理の一貫性が失われるのはここにおいてである。フランクは、一方では自己の思想に生成の契機を導入するためにフッサールの超越論的主観性という観照のための定点を解体しておきながら、他方では、その超越論的主観性を暗黙のうちに復活させることで、時間を超えたイデア的なものの客観性を確保し、プラグマティズムに巻き込まれることを回避している。イデアと生成という二つの対立する契機を統合させようとするフランクの試みは、ベルクソン的な生成の論理とフッサール的なイデア的なものの論理の両者を、論理的に一貫させることなく曖昧に混在させることで成立しているのである。イデアと生成という二つの対立する契機を統合させようとするロシア・ルネサンスの思想に特有の試みは、フランクの緻密な理論においても、論理的な飛躍、あるいは論理的な曖昧さを含むことでしか成立しないのである。我々はフランクの思想を検討した結果として、そうした結論を主張することができるだろう。

５．創造と流出：ベルジャーエフとフランク

以上のように、われわれは『知識の対象』におけるフランクの思想とベルクソン哲学の関係について検討してきた。フランクのベルクソン解釈は、一見ベルクソンの思想そのものに沿って、それが可能性として含んでいることを明るみに出そうとする試みに見えるが、実際にはベルクソンの内にそれとは異質なものを持ち込んでいる。言い方を変えれば、フランクはフッサールから離れることでベルクソンに近づいているように見えながら、実際にはフッサール的なものを残存させたまま、それをベルクソン的なものに持ち込み、両者を曖昧に混在させている。そしてそうすることで、イデアと生成の統一としての全一体の概念を成立させている。しかし、すべてが流動するはずのベルクソン的な持続にフッサール的な定点を加えたフランクの全一体の概念は、ベルクソンの持

続とはやはり決定的に異質なものになってしまっている。

フランクの同時代の思想家であるベルジャーエフもすでにそのことに気づいていたように思える。それは、彼が『知識の対象』に関して書いた書評的な論文を読めばよく理解できる[20]。ベルジャーエフはそこで、不変のものを真実在と見なすパルメニデスと生成変化するものを実在と見なすヘラクレイトスの名を象徴的に用い、前者がプラトンをはじめとする形而上学の歴史全体に継承されているのに対して、後者はベーメ、そして現代ではベルクソンの内にそのすぐれた現われが見いだされるとした上で、フランクはヘラクレイトス的なものとパルメニデス的なものを統合したかったのだろうが、それに成功していないと述べ、さらに、フランクが動的な一元論の支持者であることは分かっているが、それでもフランクの哲学的な気質は観照的、静的であり、ヘラクレイトスよりもむしろパルメニデスに近いとも指摘している。

ベルジャーエフはこのように指摘するにあたって何か根拠を示しているわけではなく、フランクの思想が非ヘラクレイトス的、したがって非ベルクソン的であるとする彼の断言は独断的にも見えるのだが、このベルジャーエフの指摘が、我々が上で行った分析の結果とほぼ完全に重なり合っていることがわかるはずである。フランクが『知識の対象』で行おうとしたのはイデアと生成という対立する原理を統一することであり、ベルジャーエフが言うとおり、まさにパルメニデス的なものとヘラクレイトス的なものの統合である。それに、フランクが結局この統合に成功しないのは、彼が表面的には動性や生命性や創造性といったヘラクレイトス的＝ベルクソン的なものを主張しながら、他方でフッサールから持ち込んだ超越論的主観性という、まさに「観照的」で、「静的」なものを常に保持し続けていたからである。ベルジャーエフはフランクの思想を分析しているわけではないし、ましてフッサールに言及しているわけでもないが、フランクの思想の非ベルクソン的な性格とそれがどのような原因に由来するのかをきわめて的確に言い当てているのである。

我々が別の論文で明らかにしたように[21]、ベルジャーエフ自身はロシア思想のプラトニズム的な傾向、上に挙げた言い方で言えば、パルメニデス的な観照的、静的な傾向を批判するとともに、自由、生成、創造といった、ヘラクレイトス＝ベーメ＝ベルクソン的な方向に思考を展開させる思想家であるが、そうした傾向を持つ彼からみれば、フランクの思考が表面的にはベルクソンと一体

20　*Бердяев Н.* Два типа миросозерцания (По поводу книги С.Л.Франка “Предмет Знания”)// Вопросы философии и психологии. 1916. Кн.134. С.302-315.

21　拙論「象徴秩序の彼方へ：ベルジャーエフの思想における自由と人格の概念をめぐって」『スラヴ研究』60号、2013年、1-28ページ。

化するような方向に進んでいながら、実際にはその内に非ベルクソン的なものを潜めていることが、おそらく直観的に察知されるのだと思われる。

ベルジャーエフの書評にはさらに興味深い指摘がある。それは、彼がフランクのような思想には変化や創造的な動き、新しいものの発生といった問題をうまく捉えることができないとしていることである。こうした指摘も特に根拠が示されているわけではなく、この部分だけを読むと、独断的な主張にしか思えないのだが、ベルジャーエフがこうした指摘をするときに念頭に置いていたと思われることを考慮に入れると、ここでもベルジャーエフがフランクの思想に潜む問題を的確に察知していること、そして彼のそうした指摘が、我々が上で行った分析の結果にほぼ一致していることがわかる。

ベルジャーエフが念頭に置いていると考えられるのは、彼が『知識の対象』と同じ1916年に出版した『創造の意味』の中で指摘している、創造と流出の対立である[22]。プロチノスに代表される流出論の考え方は、絶対的な一者から世界が流出したとする考えで、世界を生成の相で捉えるベルクソンやベルジャーエフ自身の創造の思想に近いように思えるのだが、ベルジャーエフによればそうではない。流出と創造は似て非なるものである。なぜかといえば、ベルジャーエフによれば、創造を特徴づけるのは力の増大であるが、流出論にはそれがないからである。流出論が問題にするのは、もともと一者の内に存在していた力が場所を変えて世界へと移動するという事態にすぎず、ここには力の移動はあっても、力の増大はない。流出論には、生成の流れのようなものはあるが、その流れは力を増大させることはなく、ただ場所を変えるだけである。流出には創造の契機がないのである。

ベルジャーエフが、フランクの思想には変化や創造、新しいものの発生といった問題は捉えられないと主張する時に念頭に置いているのは、おそらくフランクの思想が流出論的な思想であるということ、したがってベルクソン的な創造の思想とは似て非なるものだということである。たしかに、ベルジャーエフの指摘を考慮したうえでフランクの思想を振り返って見れば、それは明らかに流出論的な態勢を取っている。我々が上に見たように、フランクの全一体とベルクソンの純粋記憶は、いずれも世界のすべての現われを潜在的なやり方で含んでいる実在であるが、フランクの場合には最初からすべてが与えられており、それらが時間の流れの中で徐々に顕在化していく。ここでは最初に与えられているものが潜在態から顕在態に移行するだけであり、それが生成のプロセスで

22　ベルジャーエフ（青山太郎訳）『ベルジャーエフ著作集Ⅳ　創造の意味：弁人論の試み』行路社、1990年、158-160ページ。

あるということになる。フランクは、実在の生成を流出論的に考えているのである。それに対してベルクソンの記憶は、記憶である以上当然だが、あらかじめすべてが与えられているわけではない。経験の流れの中で絶え間なく生じてくる記憶が次々に蓄積され、記憶の総体は次第に増大しながら、そのたびにその姿を変容させていくのである。フランクの流出論的な生成においては、生成の流れがどこへ行きつくのかがあらかじめ決まっているが、ベルクソンの記憶はどこに行きつくのかが予想できないような、真に動的で創造的な生成の流れである[23]。ベルジャーエフはフランクの思想の中に生成の要素が現れはするものの、それが流出論的なものであって、ベルクソン的＝創造的なものではないこと、したがって、本当の意味での変化や創造や生成を捉えることができないということを的確に捉えているわけである。

最後にこの問題をもう少し敷衍しておこう。フランクの思想とベルクソンの思想の間に、なぜ流出と創造という対で表現できるような差異が生じるのか。その原因は、これまで我々が考察してきたこと、つまりフランクがベルクソンの持続の中にフッサールの超越論的主観性を持ち込んでいることと、おそらく無関係ではないだろう。時間の流れから切り離されているかのようなフッサールの超越論的主観性は、持続を観照するための定点として機能する。フランクはこのような定点を設定することで、流れて行く持続をそれとともに流れながら内側から捉えるのではなく、流れの外側にある静止した地点から捉えることになる。それは、時間の幅を持った流れを捉えるのではなく、いわば流れの中に一つの断面を作り出し、その断面から、こちらに向かって押し寄せてくる流れの全体を後ろ向きに振り返って見るようなものである。しかしそのように振り返って見ると、持続は時間の中に展開していく生成の流れという本来の姿では現れなくなる。それは、時間の遠近を失って、すべてがひとつの平面上に配置されるようにして、その全体が一気に捉えられることになるはずである。それはあたかも静止した状態にあるように見え、すべてを潜在的な状態で含んで

23　ベルジャーエフは次のように述べている。「ベルクソンにとって、存在の形而上学的な本質は生であって存在ではない。（…）形而上学的な知識は永遠のイデア、存在の元型、不動の太陽の観照ではない。（…）このタイプの世界観においては、知識は全一体の懐への回帰ではないし、絶対的な生との融合でもなく、絶対的存在そのものの動的な生のプロセス、存在そのものの内部における創造的な出来事である」。ベルジャーエフが言おうとするのは、フランクの思想は最初にすべてが与えられていると考える流出論的な思想であり、したがって、原初に与えられている「永遠のイデア、存在の元型、不動の太陽」に、約言すれば「全一体の懐」に回帰しようとする方向を取るが、ベルクソンの思想はそれとは異質で、原初への回帰とは逆の方向に向かい、未知のものへと躍動していうような真に創造的な思想であるということである。ここからもベルジャーエフがフランクの思想の本質、そしてベルクソンの思想との差異を的確に理解していることが分かる。*Бердяев Н.* Два типа миросозерцания. С.308.

いる全体として見ることになるだろう。フランクはまさにそのようなことを行っているのである。彼は全一体という実在を、力を増大させつつある流れとしてではなく、あらかじめすべてを含んでいるような全体として捉えたうえで、後からそこに変化の相を加えようとしている。その結果として、フランクの思想はすべてを含む一者からの流出というイメージを帯びてしまうのである。ベルジャーエフの指摘は、そのようなフランクの思想の性格を極めて的確に言い当てているのである。

６．おわりに

以上のように、我々はフランクの思想がベルクソン的な装いを取りながら、実際にはフッサールの超越論的主観性のようにそれとは異質なものをそこに導入することで、ベルクソン哲学とははっきりとした差異を持っていることを明らかにしてきた。こうしたベルクソンとの差異を指摘することで我々が明らかにしたかったのは、フランクもまた時間的な生成と超時間的なイデアという二つの対立する契機を統一させようとするロシア・ルネサンスの思想に特有の潜在的な志向を持っており、それゆえにその論理が不可避的に矛盾や飛躍を含んでしまうということである。我々は前節でベルジャーエフがフランクの思想の問題点を正しく捉えていることを指摘したが、そのベルジャーエフの思想もやはり、我々が以前の論文で明らかにしたように、イデアと生成を矛盾的に結合させようとするが故の論理的な飛躍を含んでいる。われわれが問題にしている潜在的な志向、及びそれに伴って生じる論理的な飛躍や矛盾は、この時代のロシア思想のかなりの範囲に共通して見い出されるものなのである。フランクの場合には、フッサールとベルクソンという同時代の西欧哲学を参照し、それらが有する異質な二つの原理を曖昧に重ねることで、矛盾した実在の概念を論理的に導出しようとしている。しかし、その論理に破綻が生じることは避けられない。我々はプラグマティズムや経験論の問題を媒介とすることでそのことを論証する試みを行った。

本論文は、科研費基盤研究（C）「ロシア宗教ルネサンスの思想と世界戦争」（課題番号25370366）の助成を受けて可能になったものである。